研 究 課 題	児童文学および子どものためのコンタクト・ブックにおける道徳的教訓とジェンダー規範について
研究代表者	伊　藤　淑　子（表現文化学科　教授）

Ⅰ．研究の目的

欧米におけるジェンダー規範形成の過程を、児童文学および子どものために書かれたコンダクト・ブックに探るのが本研究の目的である。子どものために書かれた文学や作法書には、その社会が期待する理想的な子ども像が映し出されている。子どもに与えられた物語や教訓話を分析することによって、その背景にある社会構造や文化的な価値基準が見えてくると考える。

研究の対象とするのは多くが 19 世紀に書かれた児童文学とコンダクト・ブックであるが、これらのなかに埋め込まれた教訓や規範は、現代においてもその影響力を失っていない。現在においても子どものリーディングリストに 19 世紀の児童文学が多く含まれている。イギリスの児童文学では『不思議の国のアリス』『宝島』、アメリカ児童文学では『若草物語』『トム・ソーヤーの冒険』などは、子どもに与えられる物語のなかにかならず含まれる作品であるが、それらは執筆されてからすでに 100 年も 150 年も経過している。そのあいだに世界の情勢、メディアの機能、人間関係のあり方も大きく変化していることは明確な事実であるが、子どもたちは過去の時代を生きた登場人物たちが繰り広げる冒険や出来事をとおして感情的経験を積み重ねることを課されているのである。

その意味において 19 世紀の児童文学ならびに子どものための読み物を分析し、そこにある教訓とジェンダー規範を考察することは、現代の問題を考えることにほかならない。過去に書かれた物語を消費するのは、過去の子どもたちだけではない。現代の子どもたちもまた 19 世紀の物語を、読書教育という制度によって好むと好まざるとを問わず、いわば強制的に消費させられているといえるだろう。

いま若者たちは社会制度的あるいは文化的な性をどのようにとらえているのだろうか。現代社会において切実な男女の差はないかのように見えるかもしれない。法的な男女平等の確立が進み、性による不平等を可視化することは、いまではなかなか困難ことであるともいえる。たとえば大正大学の学生に「男女による不公平をこれまでに感じたことがあるか」と問うと、「男女による差別を経験したことはない」というのが大半の学生の答えである[1)]。その一方において、「男女の本質的な差はある」というのが若者の実感でもある。「男女は資質において差異をもつ」が「男女間の不平等はない」というのが現代の大学生世代のジェンダー感覚であるといえよう。

「差はあっても不平等ではない」という彼らの感覚は、19 世紀の子どもの読み物におけるジェンダー認識と、じつはよく似ている。啓蒙主義における個人の権利の概念の発見を経て、19 世紀にかけて確立されていく近代の文化的パラダイムの形成において、男女間の不公平な差別が公に推奨されたことは、少なくとも英米においてはなかった。にもかかわらず、女性は参政権も財産権もない状態に置かれたのである。そこには逆説的ではあるが、権利が与えられなくても女性は尊重されうる、というロジックが構築された。たとえば 19 世紀アメリカを代表する思想家であるエマーソンは、女性は参政権がなくても、父親や配偶者に意見を訴えることによって政治的影響力を社会に発揮することができると説明している。

女性参政権運動、女性権利拡張運動、ウーマン・リブ、フェミニズム、などさまざまに呼び名を持つ女性運動も、男女共同参画という標語に飲み込まれ、ジェンダーの不均衡による不平等感は縮小している。男らしさの規範も女らしさの規範も、抑圧的な力ではなく、自由選択に基づくライフスタイルの一つの指針であるととらえられるようになったといえるのだろうか。

19 世紀アメリカの女性ジャーナリストであるマーガレット・フラーは『19 世紀の女性』のなかで、男女の差異は男女が完全に同じ体験をしてからでなければ語れない、と論じている。19 世紀から 20 世紀へ、子どもたちのジェンダー経験は、あらかじめ性に

1）2009 年度開講の「欧米文化テーマ研究：ジェンダーからみる欧米文化」におけるディスカッションをもとにしている。

基づいて定められたものから自分自身で試し選ぶものへと変化したといえるだろうか。子ども時代のジェンダー経験の場として、児童文学やコンダクト・ブックの果たす役割は大きいが、19 世紀の子どもたちがこれらのなかでどのような教訓にふれ、どのようにジェンダー認識を含む人格形成を促されてきたのかを確かめ、そこに現れる規範が、映画やアニメーション、児童文学など今日の子ども文化を成り立たせているもののなかで働いている道徳性とどのように関連するのか、あるいは異なるのかを分析する。

Ⅱ．研究の経過

19 世紀のアメリカの子どもたちに向けて書かれたコンダクト・ブックの主だったものは、現在 *A Collection of Conduct Books for Girls and Boys in 19th Century America*（アメリカ 19 世紀の少女・少年のためのコンダクト・ブック）として復刻出版されている。これに収められた少女向けの作法書、少年向けの作法書を分析し、比較した。子どもたちに読み継がせるべき児童文学としての地位を確立している作品と異なり、これらのコンダクト・ブックで描かれる物語は、教訓のためのたとえ話であることを包み隠そうとしない。それだけ教訓性をあらわに見せることになる。

イギリスにおける 19 世紀の子ども向けの読み物として、*Songs and Tales for Children: A Collection of Chapbooks in 19th-Century*（子供のためのチャップブック－ 19 世紀英国伝承歌・物語・絵本集）として復刻集成された資料を主として、分析を進めた。チャップブックは行商人が売り歩いた薄い廉価本で、地方にも普及し大衆性的な人気を得ていた。本格的な児童文学が生み出されるまで、子どもの読み物としての需要は高く、昔話を素材にしたり挿絵を入れたり、子どもの読者を意識して作られた。

子どもの教育については早くから啓蒙思想家たちによって多くのことが語られてきた。17 世紀のジョン・ロックは『教育論』のなかで、子どもの教育に不可欠なものは楽しみと喜びであると語り、18 世紀のジャン・ジャック・ルソーは、子どもは自然から学ぶべきだととなえている。しかしルソーが『エミール』において男子が市民として成長することの重要性を説く一方で、エミールのパートナーとなるべきソフィーの教育については男性を支える存在であることを第一義としたことに顕著であるように、子どもの性別は、かけられる期待の大きな分岐点であった。

そのことを考えると、19 世紀初期のアメリカの思想家であり教育者であったブロンソン・オルコットの教育論に子どもの性別による教育の差異がとなえられないのは画期的なことであるといえるだろう。19 世紀アメリカはトランセンデンタリズムが文化の主流を占めていたが、そのなかでどのような教育論が展開されたのか、どのようなジェンダー規範がとなえられたのかを考察するために、ブロンソン・オルコットの『子どもの教育における原理と方法』を分析した。

しかしその一方で、アメリカのコンダクト・ブックにはキリスト教を前面に押し出した男女の教訓に満ちている。子どもたちは「少女」であることと「少年」であることを早期に意識することを期待され、少女は控えめで家庭的な存在になることを、少年は正義にあふれた勇敢な人物になることが教えられる。

児童文学になると、コンダクト・ブックのようなあられもない教訓性は影をひそめるが、それでも男女の活躍する場所を社会と家庭に分けている点は変わらない。たとえばブロンソン・オルコットの娘であるルイザ・メイ・オルコットの『若草物語』では、快活で自由奔放な少女も、最終的には妻として家族や夫に献身的に生きることに喜びを見いだすのである。

19 世紀のコンダクト・ブックで語られる物語のもう一つの特徴は「死」の身近さであろう。子どもの死亡率が高い時代に、子どもたちに語られる物語で子どもの死が頻出するのは当然のことであるかもしれないが、グッド・ボーイであることは、死を信仰心とともに受け入れることと同義である。子どものための読み物にキリスト教的な教訓が目立つのは、衛生状況や医療のあり方によって失われていく子どもの命が多数あったことと関係のないことではないといえる。

医療の格段の発達によって、先進国における子どもの死亡率が限りなく縮小された今日、子どもの読み物における「死」への言及はたしかに減少している。子どもにとっての克服すべき問題は、いつ襲ってくるかわからない死ではなくなっている。

2009 年度の取組として *A Collection of Conduct Books for Girls and Boys in 19th Century America*（アメリカ 19 世紀の少女・少年のためのコンダクト・ブック）の分析、Songs and Tales for Children: A Collection of Chapbooks in 19th-Century（子供のためのチャップブック－ 19 世紀英国伝承歌・物語・絵本集）の分析を行い、また欧米の思想家による教育論を読み進めた。児童文学については、2010 年度の大正大学学術研究助成を受け、19 世紀から 20 世紀にかけての作品を、さらに読解分析しているところである。

Ⅲ．研究の成果

19 世紀に著された子どもの読み物を分析することにより、現代アメリカ文化を形成する中産階級的市民意識や規範概念が、子どもに対する教訓のなかに脈々と受け継がれてきたものであることが明らかになった。児童文学およびコンダクト・ブックから、子どものための読み物のなかに描かれるジェンダー規範と教訓は、現代文化が映し出す子どもへの期待値とかけ離れたものではない。とりわけアメリカのコンダクト・ブックにおいては、アメリカ的な価値観をキリスト教のディスコースで子どもに伝えようとする意図が強く、これは現代アメリカの中産階級のモラルにも通じるものである。

家族が突出した意味を持つこともアメリカ文化の特徴であるが、コンダクト・ブックのなかの子どもたちは家族の庇護を受ける存在であるというよりも、家族が機能するための要として、道徳の守り手であることを期待される。現代アメリカ文化の大きな部分をしめるものに映画があるが、アメリカ映画に登場する子どもたちは異常なほど「いい子」であることが多い。昨年公開された『私の中のあなた』の原作となった自伝は白血病の姉を助けるために臓器提供できるデザインされた赤ちゃんとして生まれた妹の苦悩を描いて注目を集めたが、映画化された作品においては、臓器提供の苦悩よりも家族を思いやる少女の心遣いの美談のほうが勝る作りになっている。「いい子であること」「家族への思いやりを忘れないこと」「信じることに忠実であること」という 19 世紀のコンダクト・ブックの教訓は、そのまま『私の中のあなた』の姉思い、家族思いの少女の道徳的判断の核になっているともいえるだろう。

コンダクト・ブックにおける呼びかけのなかで繰り返し強調されるのは、無知であることの罪深さである。勉学に励むことが神に対する責任であるという点からも、教育を市民社会形成の中心的課題としていた移民社会アメリカならではの特徴であるといえよう。少年への呼びかけのキーワードが「義務」であるのに対して、少女への呼びかけが「善良・従順」であることは、顕著なジェンダー差であるが、恭順な市民になるために教育が不可欠のプロセスであると考えられていたことは少年少女に共通することである。

子どものための読み物を読み解くということは、社会が期待する子ども像を分析するということにほかならない。どのように子どもの理想像が描き出されたかを考察することは、その文化に内在する価値観をあぶり出すことでもある。19 世紀におけるジェンダー規範の形成という観点から欧米の児童文学、コンダクト・ブックを読解してきたが、アメリカを中心に、文化的価値観、理想的市民像、現代に通じる子どもに期待される社会的機能、19 世紀の生活の実態など、得られた収穫は大きい。

Ⅳ．研究の課題と発展

今後の研究課題として、アメリカを中心に、子どもに向けた読み物における規範的呼びかけという視点から、19 世紀と現代を比較考察したいと考えている。現代の子どもたちのためのリーディング教材、現代の教育現場で作成されるリーディンリストを分析し、そこに潜むジェンダーを含む社会規範を分析したい。19 世紀と同じような形で子どもたちが一律のジェンダー規範にさらされているとは考えにくいのが現代であるが、情報にあふれた社会にあっても、子どもたちは社会の理想を何らかの形で受け続けていると考えられる。以下の文献を中心に、今後の研究を進める。

Sylvia M. Vardell, *Children's Literature in Action*, Libraries Unlimited, 2008.
Shelby A. Wolf, *Interpreting Literature with Children*, Lawrence Erlbaum Associates, 2004.
Edward B. Fry ed., *The Reading Teacher's Book of Lists*, Jossy-Bass, 2006.
Joanna Sullivan ed., *The Children's Literature Lover's Book of Lists,* Jossy-Bass, 2004.

子どもがどのような読みものを与えられてきたのだろう、という問題意識は、性差をめぐる議論の不毛さから得たものである。女性が歴史的に不利な立場に置かれてきたことは明白な事実である。不利な立場とは、決定権から疎外され、権利から疎外され、その帰結として自由を行使することができないことであり、男性の意思決定に比較して、相対的に女性の思考や行動が制限されてきたことをいう。近代的な人権が広まり、個人が尊重される時代になっても、女性が権利から排除されてきたことは、各地でたくさんの女権拡張運動を起こした。にもかかわらず、女性の権利をめぐる議論は一進一退を繰り返しているかのような外観を呈するのである。

女性運動の主張はもとより一枚板ではない。たとえば、女性参政権の獲得をめぐるアメリカにおける議論は、「女性も人間として当然の権利である政治に参加

する権利がある」という意見と「堕落した政治を是正するためには高い道徳性をもつ女性の意見や判断が必要である」という意見とのせめぎ合いのなかで紆余曲折を経て、最終的には「女性特有の道徳性を政治に取り入れよう」という主張が保守的な議会を説得するかたちで決着する。女性であることの特性が活かされる社会の実現を訴えることと、男女の差によって不平等が起こらない社会の構築を求めることは、本来矛盾することではないはずであるが、「女らしく生きたい」のか、「男並みに生きたいのか」という二者択一の問いに還元され、いつも両者の主張が対立するものであるとみなされてきた。

ジェンダーをめぐる議論の困難は、別のトラック（線路）で行われている主張がいつのまにかポイント制御のないままに混入してくることによって引き起こされてきたといえるだろう。道徳から解放されて生きている人間はいない。とするならば、ジェンダー規範の影響を受けない女性もいない。問題は、自由と権利を主張することが、ジェンダーの道徳的規範に反する姿勢を要求することだといえる。

人間は自由に生きるべきだ、という言説はいま政治的に正しい。しかし同時に、家族のために献身的に生きる女性像や、美しく装う魅力的な存在としての女性像もまた、メディアによって繰り返し描かれる。自分よりも家族のために、あるいは集団の中のサポート役を喜んで引き受ける女性は、映画やドラマやニュース・ストーリーのなかで賞賛を受ける。華やかなモデルたちのグラビアは日常にあふれている。美を競い合うことは女性の意思によって行われていると言いつつ、美の基準を作り上げているものの正体は別のところにある。他者が期待する目線で自己を規定するところにミスコンテストは成立するといえる。

そのようなダブルバインドを形成する一つの場所として、児童を対象とする文学や読み物を分析してみようというのが、継続中の研究である。子どもたちが出会う物語のなかで、ジェンダーをはじめとする規範がどのように示されているのか、を考える。

幼少期に出会った物語の影響を計測することはもとより不可能であるとしても、逆に、幼児期から思春期にいたる過程で体験した価値観や感動から完全に解放された人格形成を行うことも不可能であるといえよう。子どもが読む物語は、子どもにどのような価値観をもって物事を判断するべきであるか、どのような行為や感情を社会が評価しているか、ということを示す文化的なメルクマールである。

子どもたちに与えられる読み物は、かならずしも子どもたちの生きる社会の現実を映すものではないとしても、そこに描かれる道徳規範はその社会で許容される思考や行動のパターンを示している。子どもの読むものを分析することが文化研究にとって重要な意味をもつのも、この点においてであると考える。

研究対象は今後も英米を中心とする英語文化圏の資料であるが、もう一つの方向として、子どもの読み物が翻訳されたとき、それぞれの文化的な背景の影響をどのように受けるか、という比較文化的視点も加えていきたいと考えている。

翻訳がまったく異なる意味をもつ物語への転換となる例を一つ上げれば、Garth William の *The Rabbit's Wedding* がある。これは『しろいうさぎとくろいうさぎ』という邦題で翻訳され、日本でも人気の高い絵本であるが、題名にも明らかなように、日本語翻訳のほうは「結婚」ということが非常に曖昧にされている。メスである白ウサギにオスの黒ウサギがプロポーズするセリフは、原作では "I wish you were all mine!" であるが、日本語訳は「これからさき、いつもいっしょに　いられますように」という願いともなっている。

ここに示されているのは、アメリカの文化が想定する結婚の意味と、日本語表現の前提の差異であろう。直訳すれば「きみをすべて自分のものにしたい」「それならば私はあなたのものになる」という英語表現を、「いっしょにいましょう」という約束に、文字通り「翻訳」しているのである。

英語で書かれた子どもの読み物を分析することによって、その社会に内在するジェンダー規範をあぶりだすこと、それがフェミニズムの言説のなかで批判される社会システムとどのような関わりがあるのかを考察すること、また、英語文化圏の子どもに向けたことばが日本語に翻訳されるとき、どのような文化的意味変化を伴うのかをみていくこと、この３点を中心に今後も研究を続けていきたいと考えている。